

池端雪浦著『フィリピン国民国家の原風景』を読んで

東南アジア課程フィリピン語専攻一年 7502160 吉永知央

1. 著者の問題意識

本書はホセ・リサールの祖国感と国民感に関して書かれている。

著者は「はじめに」において、先行研究では...

1 リサールがフィリピンの独立に際して、フィリピンという国とその国民をどのように考えていたのかという検討が不足している。

2 リサールの思想や概念を検討する際に、それを当時の現実に即して考えることを軽視してきた。という二点を指摘し、これを踏まえて論を進めている。

2. 著者の分析

リサールはメスティーソの家系に生まれたため、彼が「祖国」に関して考えるときはこのメスティーソ文化の影響を受けているということを前提としている。

当時の書簡から、当初予定されていた彼の留学先がスペインではなくパリであるということに着目し、留学の目的が政治に密着した活動ではなく、文筆活動であったと裏付けている。つまり、文筆によって祖国を救済するための留学であったとしている。

以上のことを踏まえて本書では、植民地支配期以前に、単一の政治的統合体が存在しなかった地域で、国家が生まれ、国民が作り出される過程において、リサールの思想と影響力はどのような内容であったかについて書かれている。

3. リサールの「祖国」への認識の推移

アテネオ学院時代；フィリピンをその一部にするスペイン国家で、確固たるイメージはまだない。

サント・トマス大学時代；抽象観念ではなく、「かれ自身の祖国(=フィリピナス)」として認識する。

スペイン留学後；著書『祖国愛』の中で、「祖国」=「偶像」とする。祖国は絶対的な愛の対象。

『ノリ・メ・タンヘレ』の出版によって、人々に「祖国=フィリピナス」を形象化する。

4. 著者の結論

リサールの人生に即して思想的営為を追えば、彼の祖国感と国民感をイメージすることは可能。

彼が「フィリピナス」を「わが祖国」と呼ぶ時の条件は、「植民国のスペインから共通の抑圧と痛み
の歴史を体験してきた土地」であることと、「スペインと生活のありよう、喜びを共有しない土地」である。それは、彼にとっての「わが祖国」の認識が、祖国をスペインから分離し、一つの国民国家として自立させることだったからであるとしている。

5. 評価

リサールを取り巻く当時の現実に即して考えることは今までになく斬新である。

ただ単に自分の考えを述べるのではなくて、他の文献からの引用を根拠として、自分の意見に説得力を持たせている点が読者を納得させる要因であると感じた。

読み手を納得させる文章を書くには、日頃から文献に目を通して様々な考え方を知り、そこから自分で問題を設定することが重要であると思知らされた。